

ラパチーニ博士への^{ノート}手紙，あるいは 「ラパチーニの娘」^{ノート}覚書

小林 史子

ラパチーニ博士，貴方の物語（Nathaniel Hawthorne, “Rappaccini’s Daughter,” 1844）の英語版タイトルが “Beatrice; ou la Bell Empoisonneuse” ではなく “Rappaccini’s Daughter” となったのは，大変結構なことです。¹ 貴方のひどさ，つまり貴方の父親としての権力の絶大さをより効果的に示唆することになるからです。私たちの国にはかつて「菅原孝標女」とか「藤原道綱の母」などと呼ばれる名前を持たない女性作家たちがいました。前者は『更級日記』，後者は『蜻蛉日記』という優れた作品を残しているのに，父親や息子の名前を冠してのみ世に知られているというのは，なんたることでしょう。あの紫式部だってそうした女房名で知られているのだし，清少納言は本名が不詳らしいのです。それなのに，ふたりとも父親の名前ははっきりと判っています。平安時代における女性の地位の低さ，立場の弱さ，そしてその背景たる父権の絶大さは，彼女らの名前のありようが十分すぎるほど物語っています。貴方の物語のタイトルは，私たちにまさにこのようなことを連想させてくれるのです。

貴方は娘ビアトリス（Beatrice）に対して絶大なる権力をふるいました。彼女を庭園の中に閉じ込め，外界について無知のままの状態に置きました。彼女の意思を考慮せず，婿選びを行い，娶わせようとしていました。そして何よりも，彼女を有毒の怪物に仕立て上げたことが，彼女を悲しませます。しかし，彼女を苛めるのは貴方だけではありませんね。貴方の物語の中に登場する男たち，パリオニー（Baglioni）教授も青年ジョヴァンニ（Giovanni）も結果として，彼女を苛め，死へと追いやるのです。貴方の物語にはどうしたわけか，彼女を案じたり，守ってくれたりする女性が不在です。彼女は孤立無援です。母親は必ずしも娘を守るものとはかぎりませんが，とにかく，そもそも母親が不在なのです。物語中，母親については，ジョヴァンニの母親について一度言及があるだけです。より重要な役割を果たしているはずの，ビアトリスを産み落とした母親については何の言及もありません。ラパチーニ博士，貴方はどうやって娘を儲けたのでしょうか。母親はどうしたのでしょうか。いらぬ詮索をしたくなりますが，それはひとまずやめておきましょう。母親不在の物語は，強力な父権の存在をそれだけいっそう強く読者に印象づけることだけは確かです。貴方の物語は，男たちがよってたかってひとりの娘を苛める物語だと言えましょう。

しかしながら，寡黙なる貴方が最後の最後に口を開いて，娘をこのような境遇にした真の意図を明らかにするとき，意外にも私たちの貴方を糾弾する気持ちがふっと薄れます。そして，パリオニー教授やジョヴァンニと比べてみると，貴方の方がまだましに思えてきます。神をも恐れぬ冷酷無比な科学者が創り出した庭園は確かに悪夢版エデンの園ではありますが，ある観点から見ると，理想に満ちたエデンの園と呼べる要素はあるのではないかと，いう気がします。貴方は女性にとってそんなにひどい人ではないのかもしれない。この^{ノート}手紙は，いわば，その思いを伝えるためのものです。

まずはバリオーニ教授のひどさを見てしましましょう。教授はジョヴァンニの父親の古い友人です。いわば父親代わりとしてジョヴァンニに接し、ラパチーニ博士の毒手から彼を守ろうとします。しかし、純粋な父親的愛情から、というよりは、博士に対する強烈な対抗意識からそうするのです。この「父親」もまた貴方に劣らず自らの科学観あるいは価値観に拘泥しているように思えます。

博士との対決のために教授が手にする武器は、高性能の「解毒剤」ですが、これは教授の科学観を適切に表しています。何よりも人命を尊重し、病気を癒すための医学を志す彼にとって、「毒」はマイナス価値しかもたない抹消されるべき代物なのです。「毒」は「解毒剤」を以て除去できると考えるのです。明るく、健康的で単純な彼はそう割り切っています。ところがラパチーニ博士にとっては、「毒」は薬でもある。ほかならぬ教授がこれを説明してこう言っております、「すべての薬効は毒草と呼ばれるものの中に含まれる、というのが彼 [ラパチーニ] の理論なのだよ ("It is his theory, that all medicinal virtues are comprised within those substances which we term vegetable poisons," 100)」と。科学者としては、博士、貴方の方が教授より複雑にものを考えているのですね。あれか、これか、と割り切りたがる発想法ではないのですから。

ホーソン氏の短編 "The Birth-mark" (1843) においては、科学者エイルマー (Aylmer) はパラケルススを始めとする異端的な科学者たちの書物を所有し、明らかに錬金術師的な技を披露します。貴方の物語にはそのような書物や技に関する記述は見つかりませんが、上記のような毒に対する考え方、および毒人間を創るという発想から推測すると、貴方も大変錬金術師的であると言えます。科学史研究者の金子務氏によれば、「毒物さえも適量を投与すれば薬になるという思想」はまさにパラケルススによって独創されたのであって、パラケルスス以前の、ヒポクラテスに由来する四体液説に依拠する医学では「反対物による治療」を行っていたそうです (金子222-23)。貴方の思想はパラケルススの方法論に似ており、バリオーニ教授の考え方は、いや対症療法を主体とする現代の西洋医学の考え方も、大筋においてヒポクラテスの方法論に似ています。貴方の物語を記した M. de l'Aubépine ことホーソン氏の時代、すなわち近代的な科学が発達しはじめる19世紀半ばにおいては、教授の考えの方が理にかなない、貴方のそれは時代遅れで異端的で危険だと感じられたことでしょう。だからこそホーソン氏は、「後者 [博士] の方が優っていたとふつう考えられていた ("the latter was generally thought to have gained the advantage," 100)」と記述しながらも、バリオーニをパドヴァ大学 (the University of Padua) の教授の地位に就かせ、貴方を野に下らせたのでしょう。

そう言えば、貴方の物語の時代は何時なのか、異端的な科学者がどう扱われた時代なのか、それに関する記述はありませんね。ホーソン氏は、「遠い昔 ("very long ago," 93)」と記すのみです。しかし、たとえば Carol M. Bensick は、歴史的事実を援用して物語が起きた年代を1527年から1533年までのどこかだと特定しています (Bensick 69)。年代のヒントになる個所を物語中からのみ探すとすれば、チェリーニ (Benvenuto Cellini) の名前が少し役立つでしょう。バリオーニ教授は「解毒剤」をチェリーニという実在の彫金家の手になる銀の小壺の中に入れてジョヴァンニに渡します。チェリーニは1500年から1571年まで生きて人ですから、少なくとも貴方の物語の時代は16世紀以降であり、チェリーニの作品が入手し易かった時代だと考えられます。錬金術がまだ力を持っていた時代だと見てもよいでしょう。ちなみに、ユングによれば、チェリーニは自伝の中で父親が火蜥蜴の幻覚を持ったことを記しています (ユング125)。火蜥蜴とは錬金術師が「第一質料」の霊と考え

たもの（ユング68）。だとすると、チェリーも錬金術と無縁ではなかったのですね。そして、教授とジョヴァンニの属すパドヴァ大学はルネサンス期にはアリストテリズムのパドヴァ学派が活躍した所で、パドヴァの大学には神学部はなく、「諸学科のなかでもとくに重視されていたのは医学で、論理学や自然哲学はその予備課程」（清水193）だったそうです。となると、医学はたんなる技術や実学ではなく、哲学や神学と関連した価値観を体現する場でもあったのでしょうか。

とはいえ、年代を特定することやバリオニー教授と貴方の医学観を科学史・哲学史の中に正確に位置付けることは、目下の私たちの関心事ではありませんし、それは手に余ります。ここでは科学史・哲学史において名高いパドヴァ大学が物語の舞台になっていることを重視するに留めます。そして、医学は重要な価値観を表す場であり、ひとは近代に通ずる類いの科学を、もうひとは錬金術にも似た類いの科学を目指すがゆえに対立していたのだ、と確認しておけばよいと思います。

ところで、教授はビアトリスに会ったことがなく、噂や伝聞の類いでしか彼女についての知識を得ていません。つまり、彼女が比類なきほどに美しいこと、そして父親たる博士から医学の知識を教わり、教授の職にも匹敵するまでになっているとのこと、これだけしか知りません。教授はジョヴァンニに、「たぶん彼女のおやじさんは私の地位を娘にと思っているのだろう（“Perchance her father destines her for mine!” 101）」と言います。彼女が教授の地位を脅かす存在だと思っているのです。後にジョヴァンニによって見出されるのですが、博士は彼女に科学的知識どころか、常識的なありふれた知識すらも教え込まなかったのですね。貴方は彼女を知識から遠ざけて、無垢の状態に置いたのです。にもかかわらず教授は勝手に一人歩きしている噂を信じています。自分で確かめることもなくこうした噂を信じている彼は、真実を見定めるはずの科学者としては軽率です。そして、「教授の地位」などということを持ち出す彼に、女性の地位向上に怯えるフェミニズム嫌いの世俗的な男性の姿を見る思いがします。もっとも、先ほど見たようにパドヴァの大学では医学が最重要視されていたとなると、その教授の地位は私たちが現在考える以上の大きな名誉と権力を意味していたのでしょう。

教授はアレグザンダー大王にまつわる故事を見つけたとき、博士がジョヴァンニに対して仕掛けたからくりを見出したと思ひこみます。大王のもとにインドから送りこまれた美女は毒によって育てられたため、その芳しい息が、したがって、彼女の存在自体が有毒なのだが、「ある賢明な医師（“a certain sage physician,” 117）」がいち早くその事実に気づく、という故事です。有毒の美女はビアトリス、アレグザンダー大王はジョヴァンニ、そしてもちろん「賢明なる医師」は教授自身だとする構図が彼の中で出来上がるのです。教授は青年がモルモット代わりにされて、死、あるいは死よりもずっと恐ろしい悲運に至るのだという確信を持ちます。

確かに、教授は鋭くも有毒の美女とビアトリスの類似性を見抜きました。しかし、彼には、ビアトリスは有毒の美女とは違って恋心のある人間であること、および、後述するようにラバチーニ博士が青年をただのモルモットとしてだけ利用しているのではないこと、という重要な二点が見えていません。教授は、貴方たち父娘の精神まで深く立ち入ろうとはしないのです。しかも、人間をただのモルモットと見なすのは、この件にかぎっては貴方よりむしろ教授の方だと考えられます。教授はジョヴァンニに「解毒剤」を手渡すとき、ビアトリスにそれを与えて「結果を楽しみに待ちなさい（“hopefully await the result,” 119）」と言います。実はこの直前に、教授はジョヴァンニが毒人間の徴である芳しい息を吐き始めたことを知ります。それなのに教授はジョヴァンニもその「解毒剤」を飲むように、とは言いません。「結果を待ちなさい」と言うのみです。その後教授の思惑とは異なり、ジョヴァンニは自分も「解毒剤」を飲もうとしますが、ビアトリスは、それを止めて言います、「私は飲みます、けれど貴方は必ず結果を待ってね（“I will drink—but do thou await the

result," 126)」と。教授とビアトリスは、奇遇にも同じ言葉“await the result”をジョヴァンニに対して言うわけですが、彼女はもちろん「解毒剤」が致死的かもしれぬことを予感し、自分を実験台にするのを厭わずこう言うのです。

それにひきかえ、教授は良い結果のみ予想したのでしょうか。「解毒剤」の有効性にのみ目を奪われ、危険性は念頭になかったのでしょうか。それに対する明確な答えは文中からは見出せません。しかし、ジョヴァンニには「解毒剤」を勧めなかったこと、自分を実験台にしたビアトリスとまったく同じ言葉を使ったこと、この二点を考慮すると、教授をまったくの善意の人とは考え難くなります。ビアトリスを「息子」のためのお毒見係りにしてもよし、とする気持ちが透けて見えるように思われるのです。

人命尊重を唱える人道主義者であるはずの彼は、以上のような矛盾を孕んでいます。反対物を以って治療すればよいとし、精神性を捨象しがちなタイプの医学—その限界を彼の中に見る思いがします。

次にジョヴァンニです。彼はビアトリスを直接的に死に追いやります。彼は自分も毒人間化したと知ったとき、怒り、絶望し、ビアトリスに悪口のかぎりをつくします。「いまいましい奴 (“Accursed one”)」「毒人間 (“poisonous thing”)」「とてつもないぞっとする怪物 (“a world's wonder of hideous monstrosity”)」(124)などと彼女のことを呼び、意図的に自分を彼女と同じ境遇に引きずり込んだのだらう、と罵ります。ところが彼は罵るだけ罵ると気が鎮まり、今度はビアトリスを傷つけたことにも気づかず、「この世での結合 (“an earthly union,” 126)」を求めます。物語の語り手はその時の彼のことを「意志弱く、自己中心的で卑しい人物 (“weak, and selfish, and unworthy spirit,” 126)と形容しますが、その通り、まことに首尾一貫性に欠ける身勝手な男です。そのような彼の態度は彼女を絶望へと追いやります。

それにしても、ジョヴァンニにとってビアトリスとは何だったのでしょうか。彼は初めて彼女を見たとき、彼女の美しさにうたれますが、同時にその美は庭園の中心にある紫の妖艶なる毒花と二重写しになって印象づけられます。彼女の健康的な生命力に満ちた美しさの中に、本来あってはならない危険性を見出してしまうのです。その夜、彼は少女と花が登場する夢を見ます。夢の中では「花と少女は異にして同一であり、どちらも何か不思議な危険に満ちた様子をしていた (“Flower and maiden were different and yet the same, and fraught with some strange peril in either shape,” 98)」のです。花と少女は「違うけれど同じ」だということです。この「異にして同一」なるものこそが彼女の正体です。彼は「非常に理にかなった見方 (“a most rational view,” 98)」によって彼女にまつわる不思議な事象を説明したいと願いますが、かないません。彼女とは異質なもの、あるいは相反するものがひとつになって溶け込んでいる存在なのです。

彼は美と恐怖の両方を彼女の中に見たとき、「この人は何なのだ？ 美人と呼ぶべきか、それとも言いようもないほど恐ろしいと？ (“What is this being? —beautiful, shall I call her? —or inexpressibly terrible?” 103)」と自問します。それまでの彼の「理にかなった」価値観にあっては、美しい少女は恐怖の対象とはなりません。外観が美しければ内面も美しいはずなのです。だから彼はどちらかに彼女の本質を定義したくて苦しみます。定義しがたい彼女の美を、どうやら彼は東洋的だと感じているようです。「東洋の陽光にも匹敵する彼女の美しさに浴しつつ (“basking in the Oriental sunshine of her beauty,” 110)」デイトしたかった、という記述があるのです。“Oriental”という言葉によって、後に明らかになるビアトリスとあのインドの有毒の美女との類似性が巧妙にここに用意されるわけです。しかし、それとは別に、私たち東洋の読者としては、ジョヴァンニのこのような感じ方をごく当然な反応だと考えます。東洋とは、あれか、これか、といった二

項対立的な合理主義的な思考パラダイムを採らず、その解消を奨める思想（仏教や老荘思想など）を生み出した場所です。つまり、ビアトリスの本質に近い価値観を内包する場所なのです。

そして、苦しむ彼の心の中に、「愛と恐怖（“love and horror”）」「希望と懸念（“hope and dread”）」（105）というそれぞれ相反する価値が生まれます。彼の心は二分され、せめぎあいます。「愛と恐怖」はお互いにお互いを産み、同じように燃え盛り、砕け散るのです。「希望と懸念」は互角に闘い、交互に相手を組み伏せあいます。彼は彼女の本質だけでなく、自分の心の本質もまた定義できなくなるのです。それまで整然として明晰だった彼を取り巻く世界、それはとりもなおさず「非常に理にかなった見方」が成立する世界でしたが、その世界は「異にして同一」なるものに出会うことによって、二項対立的に混乱します。この混乱のさなか、彼は自分が毒人間化しつつあることを知り、ビアトリスに対して悪口雑言をはくという結果に至るのです。

ジョヴァンニはもともとバリオーニ教授同様、明晰で単純で合理的、すなわち二項対立的な価値観の持ち主であったのです。その意味で二人はよく似た「父子」でありました。

2

ラパチーニ博士、いよいよ貴方の番です。先に述べた通り、初めて貴方が口を開き、計画の目的と全容を語る時、私たちは意外な思いをします。貴方は絶大な父権をふるう冷酷な科学万能主義だけの人物ではないのかもしれない、という気持ちがしてくるのは、ひとつには毒人間化計画のメカニズムをはしなくも以下のように披露するせいです。娘が「解毒剤」を飲んだとはまだ知らない貴方は上機嫌です。

「娘よ…お前はもはや孤独ではないよ！お前の妹であるあの木から大事な花を一輪摘んで、婿殿の胸に着けてもらいなさい。今や彼はそうしても大丈夫なのだから！わしの科学とお前たちの間にある相愛が彼の身体の中で作用し、彼はもう普通の男とは違うのだ、わしの誇りにして勝利の結果たるお前が並みの女と違うようにな。お互いに愛し合い、他のすべてからは恐れられながら、この世をわたっていくがよい！」（傍点筆者）

“My daughter, ... thou art no longer lonely in the world! Pluck one of those precious gems from thy sister shrub, and bid thy bridegroom wear it in his bosom. It will not harm him now! My science, and the sympathy between thee and him, have so wrought within his system, that he now stands apart from common men, as thou dost, daughter of my pride and triumph, from ordinary women. Pass on, then, through the world, most dear to one another, and dreadful to all besides!” (emphasis added, 127)

毒人間を新たに作るには、貴方の「科学（“science”）」だけでは不十分なのですね。若い恋人たちの間の「相愛（“sympathy”）」が不可欠だ、と貴方は明言する。でも、それは「相愛」がないと肉体的接近がないから毒が効かない、という物理的な単純な論理ではないはずで。

Gillian Brownは、19世紀に流布したラマルク（Lamarck）の進化論、すなわち「生物体は行動によってその身体的特徴を獲得する（“organisms acquire their traits through their activities,” Brown 95）」という考え方をジョヴァンニの毒人間化計画の拠り所としています。その理論はたぶんビアトリスの毒人間化の説明にはなるでしょう。なにしろ彼女は生まれたときから紫花の有毒の芳香、つまり錬金術師が好む用語を借りるとプネウマ（氣息、生命の原理）を吸いつづけてきたの

ですから。ところが貴方はピアトリスの近くで生活しながら、毒人間にはならない。毒草の手入れをするのに厚い手袋とマスクで防御しても、貴方は毒に冒されつつあるらしく、病人のように見えます。同じ毒に曝されながら、なぜ貴方は毒の被害者になり、ジョヴァンニは毒人間になるのか、これは進化論だけでは説明が付きません。だが、貴方が言うところの「相愛」を考慮すれば、納得がいきます。貴方は有毒植物を嫌ったが、ピアトリスは毒花もジョヴァンニも愛しました。彼も彼女を愛しました。毒人間になるためには、愛を知る必要があるのですね。

もっとも、アレグザンダー大王の許へ送られたインドの美女も、「相愛」を利用したと言えなくはありません。大王を魅了して肉体的接触をしなければ殺人道具になりえないのですから、彼女は大王の情愛を喚起しようと必死であったことでしょう。しかし、貴方の言う「相愛」とは、そんなレベルの情愛でも、手段としてのそれでもないでしょう。愛し合う恋人たちの純愛でなければならぬ。実際、ジョヴァンニたちは一切の肉体的接触を持ちません（紫の花を手折ろうとしたジョヴァンニの右手をピアトリスが止めるために掴む以外は）。黄金、あるいは不老不死を得るのに必要なものとして錬金術師が追い求めたのは「賢者の石」ですが、貴方にとっては、「科学」と恋人たちの「相愛」が揃わないと青年を毒人間に変える「賢者の石」は出来なかったのではないのでしょうか。

錬金術師について、F. S. テイラーは「自然に対する錬金術師の態度は宗教的なものだった」（テイラー293）と言っています。また、思想史研究者の湯浅泰雄氏ももっと詳しく以下のように説明しています。錬金術師は作業の前に「神への祈り、瞑想、断食などの修行を行った。彼らは、それによって作業の成功がもたらされると信じていたからである。そういう意識変容状態の中で、錬金術師は、意識下から出現するさまざまなイメージ（もののかたち）を見た」（湯浅281）と。さらに「ここでは〔錬金術の論法においては〕内的なイメージ体験を媒介にして、物質の変容と主体の精神的内的変容が対応しながら起る、と考えられている。精神と物質は共感しつつ変容してゆくのである」（湯浅282）、と氏は説明を続けます。つまり、錬金術師というのは、物質と精神を切り離さずに繋がるものとして、感応しあうものとして捉える宗教的な人たちのようです。バリオーニ教授の科学にとっては物質がすべてであり、精神の変容などはいかがわしいだけのものでしょう。宗教と科学は切り離すべきだ、と教授なら言いそうです。貴方自身が精神的変容を試みたかどうかは不明ですが、恋人たちの心を物質的（肉体的）変容の必須物として利用したことは、つい先程見た通りです。「科学」と「相愛」、つまり物質と精神と言い換えてもよいであろう二つの要素を貴方は切り離すことなく用いたのです。

次に貴方は計画の真の目的を明らかにする言葉を口にしますが、これが私たちに意外だなと思わせる、もうひとつの原因になります。ピアトリスの「お父様、…なぜこのような惨めな運命を娘の私に課したのですか？（“My father, ... wherefore didst thou inflict this miserable doom upon thy child?” 127）」という問いに、貴方はこう答えるのです。

「どんな権力も威力も敵対できないほどの素晴らしい素質を与えられたのが惨めだ、とお前は思うのか。息をひと吹きすれば、最強のものでも倒せるのに、惨めだと？ お前は美しいが、おなじくらい恐ろしい、それを惨めだと？ それではお前は不幸にさらされながら何もできずにいる弱い女の境遇の方がよかったとでもいうのか？」

“Dost thou deem it misery to be endowed with marvellous gifts, against which no power nor strength could avail an enemy? Misery, to be able to quell the mightiest with a breath? Misery, to be as terrible as thou art beautiful? Would thou, then, have preferred the

condition of a weak woman, exposed to all evil, and capable of none?" (127)

貴方は「不幸にさらされながら、何もできずにいる」弱い女性がこの世に存在することを知っているのですね。娘をそのような境遇に置きたくなくて、どんな権力にも威力にも勝てる、美しく恐ろしい女にしたかったのだと言う。この願望は決して間違っていないでしょう。貴方はバリオニ教授より、ジョヴァンニより、はるかに女性としての娘の立場を憂い、その改善を願っている。その意味では、貴方はフェミニストです。女性は美しいだけでも、恐れられるだけでもだめで、両方を兼ね備えていなければならない、と貴方は言う。ジョヴァンニにとっては、そうした女性は「異にして同一」なるもの、苦しみ悩ませる存在でしたが、それを創り出すことこそが貴方の目的だったのですね。

つまり、貴方は、精神と物質、美と恐怖といった一見対立するものを両立させ溶けあわせて一つのものを創るのです。「異にして同一」なるものを現出させるのです。娘ビアトリスがその最たるものですが、貴方の庭園自体も「異にして同一」なるものが現出する場に他なりません。ジョヴァンニは初めて庭園に入り込んだとき、種類の植物を交配して創った「混合物 (“commixture”）」「化合物 (“compound”）」(110)ばかりを目にします。このような「混合」、「合成」こそ貴方の科学・価値観の特質を表現するものではないでしょうか。貴方は分けるのでなく、混ぜる人だ。世界を分節するのでなく、未分化状態に変えようとする人です。貴方にとって毒は薬であり、薬は毒です。貴方は娘と紫の花の対立点を取り去り、娘の中に美と恐怖を混ぜ込みました。その結果、娘を恋する青年の心に相矛盾する感情を喚起しました。貴方は見事に首尾一貫してこれだけのことをやり遂げているのです。

未分化状態と言えば、『創世記』における本来のエデンの園は、まさにその状態にあったろうと思います。いまさら言うまでもないことですが、アダムとイヴが食べたのは、「善悪を知る木 (“the tree of the knowledge of good and evil,” Gen. 2. 2)」²でした。つまり、禁忌を破る前の彼らは善と悪とを分けていなかったのです。人間の苦悩は善悪を分けることから始まりました。物事を分ける知恵、つまり知識を持たなければ、人間は楽園にいられたのです。だから貴方はビアトリスにできるだけ知識を与えなかったのですね。庭園の中に閉じ込め、世間を見せなかった。ジョヴァンニは「まるで子供に対するように (“as if to an infant,” 113)」彼女の無邪気な質問に答えることになるのです。ましてや貴方は彼女に科学の知識を与えなかった。彼女自身、自分は植物については色と香りが分かるだけで、ほとんど何も知らないのだと言明しています。そして、「そのわずかな植物についての知識すら要らないくらいだわ、艶やかでも目に入るとはっとして不快になる花がここには多いから (“I would fain rid myself of even that small knowledge. There are many flowers here, and those not the least brilliant, that shock and offend me, when they meet my eye,” 111)」とも言います。確かに美しい花が有毒であるという事実を知らなければ、彼女は不快にならずにすむのです。そう言えば、ジョヴァンニの不快も彼女の有毒性を知るところから始まりました。

とにかく貴方は知識という知識をこの庭園から追放したかのように見えます。貴方がジョヴァンニを娘の婿として選んだのは、彼が美青年であったこと、そして、彼に医学の知識がないことのためだと考えられます。彼はすぐにダンテなどを思い浮かべる文学青年ですから、理系の貴方からすれば、彼は無知にして無垢なる赤子でしょう。恋人たちは肉体的接触を避けます。ビアトリスが彼に毒を移すまいとするためですが、この時彼女は carnal knowledge をも避けていることになりませぬ。貴方の思うツボですね。

貴方は明らかに未分化状態を現出させ、知識を追放し、アダムとイヴを取り揃えることによ

て、エデンの園を復活させようとしてしました。ここでもうひとつ注目しておきたいのは、貴方の楽園回復の手順です。『創世記』においては神は先にアダムを土から創り、後にその肋骨からイヴを創りました。このイヴの誕生の仕方は、女性には気になるところです。さらに神は原罪を犯したイヴに「お前に出産の苦しみを与えよう（“I shall give you great labour in childbearing”）」と言い、続けて「夫はお前の主人となるぞ（“he will be your master”）」（Gen. 3.16）と言って、彼女を罰しました。キリスト教世界における「第二の性」たる女性の歴史は、こうして始まったわけです。

ところが貴方は、これとは逆の順序で事を展開しました。先にイヴたるビアトリスを存在させ、後にジョヴァンニを毒人間化してアダムを創ろうとしてしました。最初に女性ありき、なのです。先ほど見た貴方の言葉の中には、娘をしてジョヴァンニを「主人」と仰がせ、彼に服従させようとする考えはまったく見られない。それどころか、娘を無敵の「強い女性」にしたいあまり、貴方はジョヴァンニを娘の孤独を癒すお飾りものくらいにしか考えていないような気さえします。

そして貴方は「出産の苦しみ」からも女性を解放しようとしているように思えます。物語中にビアトリスの母親についての言及がないことはすでに述べました。このような母親不在には女性の生殖力に関する意味あいも含まれていると思います。ビアトリスは、貴方の「科学」の産物である紫花とちがって自分は「父の現実の子供（“his earthly child,” 123）」であると明言しています。そこまで言いながら、彼女は母親に触れません。母親にまつわるすべては、まるで封印されたかのように、言及されません。私たちが母親という生殖力ある性について思いを馳せる道筋は、物語の世界から削除されているのです。

先に引用した貴方の言葉からも、いや、正確には貴方が語っていない言葉から、女性の生殖力を拒む気持ちが見えます。貴方は娘と婿に、最強のカップルとしてこの世をわたっていけ、と言いますが、花嫁の父によくありがちなセリフは言いません。つまり、子供を産み、毒人間の子孫を繁栄させよ、などと言わないのです。貴方には一族の長となって君臨したいという世俗的な権力欲はない。貴方の庭園は永遠の生命の象徴たる泉を持ち、carnal knowledge もふくめてわずかな知識しか許されない場所です。エロスもタナトスもない場所なのです。毒人間は死にも打ち克つはずでした。貴方は娘と婿にふたりだけの永遠に続く自己完結的なカップルであれ、と望んだのだと思います。もっとも、この「出産の苦しみ」からの解放を、女性から産む力を奪う行為だと Judith Fetterley なら言うかもしれません。彼女は、例の科学者エイルマーの科学的野心には「人間の生命を創る欲望（“the desire to create human life,” Fetterley 27）」が潜むこと、そして、彼が女性の能力を嫉妬していることを見ぬいた鋭い学者ですから。

貴方はビアトリスに無知、不死、不妊、というを贈物を与えようとしたのです、バリオーニ教授やジョヴァンニの二項対立的合理精神には考えもつかぬ理想郷に彼女を住まわせることによって。しかし、合理的近代的価値観の持ち主たちは彼女を死に追いやりました。錬金術師的価値観はここで敗れます。貴方の見果てぬ夢の内容を理解できたと思ったので、私たちは少々貴方を弁護してみたのですが、だが、忘れないでください、娘の意思を無視した手段を選ばぬ貴方のやり方を許すとは言っていないよ。この苦言を以って、ノートと言うには長すぎた貴方への手紙を終わりにします。

註

- 1 この作品はフランスの作家 M. de l'Aubépine の “Beatrice; ou la Belle Empoisonneuse” を英訳したものだ という結構になっている。aubépin とは hawthorn (セイヨウサンザシ) のこと。
- 2 すべての聖書からの引用は、*The Revised English Bible with the Apocrypha* (Oxford UP and

Cambridge UP, 1984) による。

引用文献

- Bensick, Carol M. "World Lit Hawthorne: Or, Re-Allegorizing 'Rappaccini's Daughter,'" ed. Millicent Bell. *New Essays on Hawthorne's Major Tales*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Brown, Gillian. "Hawthorne and Children in the Nineteenth Century: Daughters, Flowers, Stories," ed. Larry J. Reynolds. *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Fetterley, Judith. *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Bloomington: Indiana UP, 1978.
- Hawthorne, Nathaniel. "Rappaccini's Daughter," *Mosses from an Old Manse*, ed. Fredson Bowers et al. Vol.10 of *The Centenary Edition*. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- Jung, Carl Gustav. *Psychologie und Alchemie*. 1944. 池田紘一・鎌田道生訳『心理学と錬金術Ⅱ』京都：人文書院，1976.
- 金子務「パラケルスス再評価と十七世紀科学革命論への視座—本書解題に代えて—」Charles Webster, *From Paracelsus to Newton: Magic and the Making of Modern Science*. 1982. 神山義茂・織田紳也訳，金子務監訳『パラケルススからニュートンへ—魔術と科学のはざま』東京：平凡社，1999.
- 清水純一「ルネサンス期の哲学」田中美知太郎編『哲学の歴史』京都：人文書院，1980.
- Taylor, Frank Sherwood. *The Alchemists, Founders of Modern Chemistry*. 1949. 平田寛・大槻真一郎訳『錬金術』京都：人文書院，1978.
- 湯浅泰雄『身体の宇宙性』東京：岩波書店，1994.